



巖窟の王は鬼房冬に入る  
 秋燕や溶岩は怒濤にいたぶられ  
 無量壽や枯紫陽花の力なほ  
 山上に神の御靈屋秋の航  
 秋蝶は光のつぶて八木重吉忌  
 黒姫山は天の石臼秋気澄む  
 冬満月孵化するごとく海中へ  
 稲滓火の風孕みては脂ぎる  
 人間を立たしむる骨冬ざる  
 本懐をとげずに滝の凍てにけり  
 鳥渡る腥きもの皆眼下  
 干菜風呂の話などして茶毘待てり  
 思慮深き十一月の狐かな

芋嵐今度生まれ来て来る時は  
 凧一号耳たぶ火照る染工房  
 堤保徳  
 中澤良子

木曾狭間八入の雨となりけり  
 戦争は一人の保身鴟の声  
 冬りんご一つひとつに夜がある  
 骸とふ容れもの秋に夥し  
 山小屋の霧のつまつてゐる枕  
 波の花浴びて戻らぬ宿世かな  
 白檜曾は立禪のごと霧去来  
 枯蓮仮名文字多き句の軽み  
 ゲバルトや芹鍋囲む労働者  
 戦場と空を一つに小夏晴  
 花種を蹲ひ採りて老いゆくか  
 産土や肥えよ肥えよと降る木の葉  
 戦場は幼子の墓雪がくる  
 湖底へと冬の花火の沈みゆく  
 柿なます寝起きばんやり母さがす

諏訪坂恵子  
 松岡善郎  
 倉科繁登  
 田中優子  
 滝澤あや  
 吉澤利枝  
 幹自聲  
 長谷川みきこ  
 二木暖  
 池間キヨ子  
 宮原桂子  
 田中信寿  
 芝野由起子  
 成瀬嘉一  
 雄長万寿美

巻頭寸言 新春一月号から青雲集欄を廃止していわゆる雑詠は岳集一本に集中することにした。数年来、新入会員のために設けていた青雲集は、一気に岳集の大海へ投句して、戸惑うという声が多かったことからの配慮であった。ところが、ここへきてめきめきと青雲集の作者が腕を上げられ、岳集で十分という自信を感ずてきたのである。さらに、近年、入会者は他の俳誌で訓練されている方が多くなつたことも含めて判断したものである。新年への期待が大きい。

腥きものとの見方——渡り鳥の視点

鳥渡る 腥きもの 皆眼下 島田 謙吉

巧みな作者である。上掲の同人作品、以下の岳集作品(愛憎を指して扇を置きにけり)。ともに優れた作を揃えられ感心した。戦火の地が鳥の目には「腥きもの」と映る。人間は鳥以下。なにが進化であろうか。作者は新潟の長老九十二歳。「腥きもの」とのいい方に戦争への深い考察がある。人間の愚行である。歴史は腥きの連続であつたとの諦観に近い思いがある。一つの戦が終結すると、また次の同じ戦の繰り返し。止む時がない。

饅頭形の黒姫山は雷でも鳴れば、石臼をごろごろ挽いてい  
るようだ。秋になり見つめるといよいよ石臼感は深い。童画  
の世界を楽しんでいるようだ。

冬満月 孵化することく海中へ 唐澤南海子

「海中へ」沈む。固定化した満月観でないのがいい。  
稲津火の風孕みては脂ぎる 田中 純子

風で煽られるさまを脂ぎるとは火色への再生感が漲る。

人間を立たしむる骨冬さる 岩上 諒磨

脊柱も尾椎骨も人間は骨で保つ。冬は骨が気になる季節か。

本懐をとげずに滝の凍てにけり 高木 忠雄

滝の本懐とはなにか。思う存分に水を落とし続けることか。  
しかし、滝が本懐を遂げるときは崩壊する時であろう。

今月の秀句

無量壽や枯紫陽花の力なほ 岩井かりん

「無量壽」は阿弥陀仏のこと。庶民に親しまれる仏さまである。枯れてもどこか紫陽花がそんな感じという手近な導きが巧みである。冬枯れの紫陽花の毬が寺の庭先にある。一つの見方でかくも枯庭が映えるのである。

巖窟の王は鬼房冬に入る 小林 貴子

佐藤鬼房を巖窟王とは一つの見方であろう。私がしばしばお手紙やお会いした感じでもっと迷いの人であった。私はそれを、如才ない心遣いに感じてきた。しかし、大方は「巖窟の王」と映り、伝説化されてきた思いもある。いずれにしても鬼房は幸せな俳人であろう。多くの親炙した俳人を持つ。

秋燕や溶岩は怒涛にいたぶられ 奥山 源丘

伊豆高原の城ヶ崎海岸で立派な柱状節理を見せて貰った。作者と一緒にあった。大室山の溶岩流の造形と聞き、晩秋の景にして過不足ない。そこがもの足りないとの見方もあろう。完璧なので、心境句としても読める点が作者の仕掛けか。

山上に神の御霊屋秋の航 清水 道径

隠岐でこんな光景に出会いどこか開眼した思いであった。

秋蝶は光のつぶて八木重吉忌 宮岡 光子

キリスト信者重吉を秋蝶が巧みに暗示している。象徴句か。

黒姫山は天の石臼秋気澄む 志摩 晴樹

干菜風呂の話などして茶毘待てり 増田 信雄

焼かれゆく死者を思えば生者は残酷極まる。いや、窯の中の御仁もよしやよしと長生き長者であつたものか。

思慮深き十一月の狐かな 功刀たかね

いまだ初冬、狐ものそりのそり辺りを警戒して。熊になど襲われないように。不思議な十一月の演出がいい。

同人集推薦候補作をあげる。

鋼青の宙にオリオン鶴に頸 佐藤 映二  
燥ぐ子のすとんと眠り十三夜 満田 光生  
きりぎりす柩の底に聞くやうな 山崎 妙子  
霧吐きつづけ風穴は泉門か 幹 自聲

外は冨一号、内は染工房の職人世界を覗く

冨一号耳たぶ火照る染工房 中澤 良子

バランス感覚が優れている。バランスの質をいかに高めるか。これが作者の課題であるばかりでなく、「岳」の俳人すべての本年度の宿題でもある。職人世界への着眼はさすがに詩情豊かな作者でない、ひょいと生まれたい。からだ感覚が「耳たぶ火照る」のユーモアを生んだ。

木曾狭間八入の雨となりにけり 諏訪坂恵子

「八入の雨」とは霜降の時期に降る雨のこと。一雨ごとに

木の葉を染めてゆく雨。見事な季語である。木曾はことに狭間だけに身に迫る感じがひしひしと伝わる。今まで例句がない。貴重な句である。

戦争は一人の保身鴟の声 松岡 善郎

プーチンを想像する。自分の欲、野望のために何千万人を犠牲にし、世界を掻きまわす。それが許されるのが許し難い。鴟がしきりに気付け気付けと鳴く。

冬りんご一つひとつに夜がある 倉科 繁登

りんごを前にしている。「りんごはなんにもいわないけれ

### 今月の秀句

芋嵐今度生まれ来て来る時は 堤 保徳

やさしい。夢幻の世界への切り口を用意して、ジーンとくる他界への思いを詠う。誰でもできる芸ではない。作者の人柄が共感を呼ぶ。私などへもう産まれくることもなし水仙花と今年の新年詠を詠んだ。家族とも友人とも「岳」のみんなとも会いたい。しかし、一度だけの生涯であった気がする。私に他界があるだろうか。半日わが家の玄関先の柱から離れなかった鬼やんまは父母の化身のような気がしているが、来世はあるだろうか。掲句は名句である。

句にやまとことばの仮名が多い。あるいは、仮名の横文字が多いという。枯蓮との取り合わせからは前者か。漢字が用いられると硬質がある。「軽み」は中味の評価ではなく、印象をいったものか。句中の横文字をどう判断するかは難しい。

ゲバルトや 芹鍋 囲む 労働者 二木 暖

フランス帰りの作者。これもフランス風景か。「労働者」との置き方に珍しい印象を与える。戦後の日常語がいつか違和感がある。世は変わったもの。ゲバルトはゲバ、闘争の意。厳しい状況を囲むのが「芹鍋」とはまことに優しい。固い言葉をずかっと置き、センスがある。

戦場と空を一つに小夏晴 池間キヨ子

「小夏晴」が珍しい。しかも優れている。沖繩の十一月である。作者が沖繩人だけに、ウクライナでもイスラエルでも戦場と空が一つとの感慨は身近に感じられる。

花種を躑ひ探りて老いゆくか 宮原 桂子

晩秋は来年のために花種を採集する時だ。毎年同じような脆く姿勢で採るのであろう。このようにして齢を取って行く。ふと感慨に沈む。これも老いたことであらうかと。巧い句だ。

産土や肥えよ肥えよと降る木の葉 田中 信寿

気が利いた木の葉である。原句の下の句は「落葉」であっ

ど」という歌詞が戦後の「りんごの唄」にあった。が、私はりんごこそ語り掛けてくる幻想がある。思惟の実の気がする。奥方を亡くし、いよいよりんごの気持がわかるのであろう。

骸とふ容れもの秋に夥し 田中 優子

秋は終末の季節でもある。草や木は枯れる。昆虫も死ぬ。野に骸が曝されているのちの問題にぶつかる。骸が魂の入れ物か。さらさら表現しているが、リアルな見方に迫力がある。

山小屋の霧のつまつてゐる枕 滝澤 あや

霧の山小屋。枕に触れる。枕の中にまで霧が詰まっている感じ。山頂近い霧の濃さや深さが身に迫る。私はこんな厳しい経験がないのが寂しい。

波の花浴びて戻らぬ宿世かな 吉澤 利枝

覚悟の新村（冥土の飛脚）であらうか。真冬の海から吹き上げる波の花。この世はこまでと命を絶つものか。芝居の追い詰められた場面を想像させながら、半ば本気、半ばフイクション。句集上木以後また新たな歩みである。

白檜曾は立禅のごと霧去来 幹 自聲

風景句であるが、厳しい心象風景を描く。霧を去来させ、わが心中を覗いたものか。迷いが霧か。

枯蓮仮名文字多き句の軽み 長谷川みき

だが、ここは「木の葉」。普通は地に落ちたものが落葉である。「肥えよ肥えよ」がいい。ここまで優しく配慮が利く者はいない。いい作者が誕生した。

戦場は幼子の墓雪がくる 芝野由起子

原句は「初雪や」であったが、合わない。これを下の句に「雪がくる」と添削。戦場に際立つものが「幼子の墓」だという。この上なく切ない。いたたまれない思いを沈める現実である。

湖底へと冬の火花の沈みゆく 成瀬 嘉一

「湖底」が鋭い。冬眠中の魚たちが大騒ぎ。沈鬱な中によく読むとユーモアもある。

柿なます寝起きぼんやり母さがす 雄長万寿美

子どもの寝起きであらう。食卓には柿なます。目を擦りながら起きてくる子の姿が見える。飯田句会の作者。

岳集推薦候補作をあげる。

溶岩食める繭の木動し木歩の忌 木村 安以  
新米食む未来今来て今過ぎて 櫻井 喬二  
ハロウィーン仮装は要らず魔女の役 星 明子  
長き夜や人生の真ん中あたり 柿谷 有史  
無花果や摺みどころのない記憶 原田ゆりこ